

無自覚な課長は NTR れる

鳳商事の営業課は、今日も活気と、そして密かな熱気に満ちていた。その中心にいるのが、課長の四宮葵（しのみやあおい）、三十五歳だ。

癖のない短く整えられた黒髪。僅かに潤んでいるかのように見える、伏せ目がちな瞳。アイロンのかかったシャツと品の良いネクタイ。その清潔感に溢れた佇まいは、彼が発する柔らかな物腰と相まって、なぜか酷く男たちの庇護欲と独占欲を掻き立てた。

「四宮課長、例のアスラ社との契約、先方が前向きに検討してくれるそうです」

「本当か、斎藤くん。よくやったな」

部下である斎藤が報告すると、葵は心底嬉しそうに目を細めた。その無防備な笑顔に、若く野心的な斎藤の胸がドクンと高鳴る。この人のためなら、なんだってできる。そんな

風に思っている部下は、斎藤だけではなかった。

問題は、葵自身がその熱っぽい視線に全く気づいていないことだ。彼はただ、真面目で、少しお人好しなだけの上司だった。

その日の夜。大きなプロジェクトの締め切りが迫り、葵と斎藤は二人きりで残業をしていた。静まり返ったオフィスに、キーボードを叩く音だけが響く。

「ふう……。さすがに疲れたな……」

一段落ついた葵が、ぐっと背伸びをする。シャツの布地が背中中のラインをくっきりと浮かび上がらせ、斎藤は思わず息を飲んだ。

「課長、コーヒー淹れましょうか？」

「ありがとう、斎藤くん。助かるよ。君も疲れているだろうに、すまないな」

そう言って葵は、労るように斎藤の肩をぼん、と軽く叩いた。その指先が首筋に触れ、斎藤の身体に電流が走る。

(……もう、我慢できない)

斎藤はコーヒーを淹れる代わりに、葵の腕を掴んだ。

「え……斎藤、くん？」

驚きに見開かれる濡れた瞳。その瞳が、拒絶ではなく戸惑いを浮かべているのを見て、斎藤の理性の糸はあっけなく切れた。

彼は葵を壁際に追い詰め、その唇を乱暴に塞いだ。

「ん……！んんっ……！」

突然の口づけに、葵の身体が強張る。しかし、抵抗しようと斎藤の胸を押す手には、全く力が入らない。むしろ、長いキスが続くうちに、その手は斎藤のシャツを弱々しく掴んでいた。

唇が離れたとき、葵の口からは、普段の彼からは想像もつかない言葉が吐息と共に漏れた。

「……はあ……っ、なんだよ、急に……。
もっと、優しくしろ……」
その目はとろりと蕩け、頬は上気している。
それは、温厚な上司の顔ではなかった。

「課長……？」

斎藤が呆然と呼びかけると、葵は恍惚とした表情のまま、挑発するように舌なめずりをした。

「……なんだよ、斎藤……。お前のキス、
すげえ気持ちよかった……。もっと、してほしい……。口だけじゃなくて、こっちのほうも……めちゃくちゃにしてくれよ……」

普段の温厚な彼からは想像もつかない、ドスケベな発言。性的接触をきっかけに、葵の隠された性質が顔を出すのだ。

この秘密を知っているのは、社内ではまだ斎藤だけ。彼は驚きながらも、愛おしさが込み上げてくるのを止められなかった。

「……っ、貴方のそんな顔、他の誰にも見せたくない」

誰もが愛おしむこの課長を、自分だけのものにしたい。斎藤の独占欲に、今、火が点いた。

「課長、俺を挑発したこと、後悔しないでくださいよ」

低く、熱を帯びた声でそう囁くと、斎藤は葵のネクタイを乱暴に引き寄せた。ぐらりと体勢を崩した葵を支えるように抱きしめ、その耳元に唇を寄せる。

「……っ、斎藤……くん……」

まだ熱の引かない瞳で葵が斎藤を見上げるが、そこにいるのはもう、従順な部下の顔ではなかった。獲物を前にした、飢えた獣の目だ。

「普段、あんたが他の奴らに愛想振りまいてるの、ずっと我慢してたんです。取引先のジジイどもが、あんたの腰に馴れ馴れしく手

を回すのも、同期の奴らが飲みの席であんたを口説くのも……全部、腹わたが煮えくり返る思いで見てた」

「そ、そんな……俺は、ただ……」

「分かってますよ。あんたは何も悪くない。ただ……あんたが、無自覚に人を狂わせるのが悪いんだ」

斎藤はそう言うと、葵のシャツのボタンに指をかけた。一つ、また一つとボタンが外され、鍛えられた胸板が露わになる。その白い肌に、斎藤は吸い寄せられるように顔を埋めた。

「ひゃっ……」

首筋から鎖骨にかけて、斎藤の唇が這う。ちろり、と舌が肌を舐め上げると、葵の身体がびくりと震えた。

「や……やめ……っ、斎藤……そんなとこ、舐めたら……っ」

口では拒絶しながらも、葵の指は斎藤の髪をきつく掴んでいる。その矛盾した態度が、斎

藤の嗜虐心をさらに煽った。

「やめませんよ。だって、課長が誘ったんじゃないですか」

「おれは、誘ってな……んくっ…… 斎藤は葵の胸の突起をわざとらしく指でなぞり、そして、ためらいなく口に含んだ。途端に、葵の口から甘ったるい声が漏れる。

「あ……ッんん……♡だめ、そこは……一番、感じるよ、なのに……っ！」 さっきまでの理性的な上司の姿はどこにもない。ただ、快感に身をよじる、淫らな男がそこにいた。